復興デザイン会議 第５回全国大会

災間を生きる都市

2023 年 12 月 06 日(水)
08 日(金)～10 日(日)

会場：横浜市立大学 金沢八景キャンパス
・オンライン（ハイブリッド開催）

主催：復興デザイン会議

「災間を生きる都市」というテーマで，第5回復興デザイン会議全国大会を横浜で開催いたします．

数年・数十年おきに起こる豪雨/土砂災害，数十・百年おきに起こる地震災害，世界各地で起こりつづける戦災，繰り返し起こる災害と災害の間に都市は存在していると言えるのではないでしょうか．同時に，人々と都市は，災害・復興の記憶と今の生活の狭間で，災間を生きていると言えます．

人々の価値観も多様化する現代において，こうした災間において空間は，都市は，そして我々は何をできるのでしょうか？

本会議を通じて皆様と議論できればと思います．

プログラム

敬称略　※変更の場合があります。

DAY1　12 月 06 日（水）

若手・学生による復興デザイン研究発表

18:30-20:00［オンライン開催］
Barbara Matelowska（東京大学）
Kasun Thalgaskotuwa（東京大学）
外柳 万里（大阪公立大学）　鈴木 敦己（東京大学）
コーディネート：渡邉 萌・荒木 笙子

DAY2　12 月 08 日（金）

復興デザインスタディツアー

DAY3　12 月 09 日（土）

開会

9:00-9:10
開会挨拶　大会実行委員長：乾久美子（横浜国立大学）
会長挨拶　復興デザイン会議会長：徳永 幸久（東京地下鉄）

U-30 復興デザインコンペ 公開審査会/最終審査会

9:10-14:30
審査委員長：内藤 廣　副委員長：野原 卓
審査委員：乾 久美子　岩瀬 諒子　岡部 明子
髙橋 一平　羽藤 英二
コーディネート：益子 智之・井本 佐保里

復興デザイン研究賞 / 復興政策・計画・設計賞　表彰式

14:40-16:40
祝辞　小川 紀一朗（アジア航測株式会社）
コーディネート：小野 悠・萩原 拓也

復興デザインとは何か?

17:00-18:30
内藤 廣　乾久美子　五十嵐 太郎　羽藤 英二
コーディネート：小野 悠

懇談会

18:45-19:45

DAY4　12 月 10 日（日）

次世代が描く地域復興：中高校生による復興・事前復興の活動

9:35-11:05
地域に住み、次の復興を担う中学生・高校生の考える、地域の復興はどのようなものか。全国の中高校生が地域の現状と過去の復興を学び、復興・事前復興活動へ接続する過程を発信する。
コーディネート：増田 慧樹

基調講演：関東大震災と都市デザイン ー震災復興のレガシーを引き継ぐ都市づくりー

11:10-12:10
講演者：鈴木 伸治（横浜市立大学）
討議者：光田 麻乃（横浜市）
コーディネート：野原 卓

ローカルな視点から考える地域防災と復興デザイン：横浜のこれから 100 年に向けて

13:00-14:30
横浜の過去と現在を照らし、そして東日本大震災の経験を学びながら、地域コミュニティが地域防災の中で果たしてきた役割を探究し、これからの地域防災と復興デザインについて考える。
稲垣 景子（横浜国立大学）　石川 永子（横浜市立大学）
秋田 典子（千葉大学）
コーディネート：井本 佐保里

Post-Disaster Urban Planning: Lessons from the UK after World War II

14:40-15:40
海外の復興事例、特に英国の第二次世界大戦からの都市復興計画事例を共有し、今後の日本も含めた復興計画の展望等を議論する。
Catherine Flinn（University at Albany）
コーディネート：中居 楓子・小谷 仁務

全体討議

15:50-16:30

閉会

16:30
閉会挨拶　來山 尚義（復建調査設計株式会社）

DAY2　12 月 08 日（金）
復興デザインスタディツアー

関東大震災から 100 年、横浜を巡る災間スタディツアー

100 年前の復興を知ることは、極めて難しい。しかしながら、災間を生きる我々が、災間を生きる都市で、過ごし、備えていくためには、過去の復興や計画を知り、同時に学びとらなければなりません。そこで、「災間を生きる都市」を学ぶための実験的ツアーを企画します。本スタディツアーは、少人数のグループに分かれ、被災や復興、エピソードといった資料を携えながら、横浜中心部を巡るツアーを予定しています。グループ内の様々な視点から議論を行い、「災間を生きる」を一緒に考えていきましょう。

ツアー対象地は山下公園、日本大通り駅、横浜公園、打越橋、伊勢佐木町など横浜市中心エリア
集合・解散場所：神奈川県中小企業共済会館（10：30 集合、17：00 解散）
※詳しいルート情報は、http://dss.bin.t.u-tokyo.ac.jp/tour_2023/ を御覧ください。（応募締切：11/27（月）正午）

【参加申込】　全国大会への参加申し込みは下記の Google Form からお願いします。
フォーム内で、お名前・ご所属・メールアドレス・オンライン参加／現地参加の希望等をご回答ください。
参加申し込みフォーム　https://forms.gle/Htxm2dWbUKfWjjQcA

【CPD 制度】　本シンポジウムは、土木学会 継続教育（CPD）プログラム（12/9 JSCE23-1496: 8.0 単位、12/10 JSCE23-1497: 5.9 単位）に認定されております。

【お問合せ】　全国大会に関するお問合せは https://forms.gle/SiN6aLhPiRemUPLw8 からご連絡ください。

【大 会 HP】　http://dss.bin.t.u-tokyo.ac.jp/symposium/symposium_2023/

全国大会参加申し込み

審査委員

U30 復興デザインコンペ
審査委員
岩瀬 諒子
岩瀬諒子設計事務所
京都大学

U30 復興デザインコンペ
審査委員
復興設計賞副審査委員長
乾 久美子
乾久美子建築設計事務所
横浜国立大学

復興デザイン研究賞
審査委員
姥浦 道生
東北大学

復興デザイン研究賞
副審査委員長
大月 敏雄
東京大学

U30 復興デザインコンペ
審査委員
岡部 明子
東京大学

復興デザイン研究賞
審査委員
小野田 泰明
東北大学

復興設計賞
審査委員
岡村 仁
株式会社 KAP

復興デザイン研究賞
審査委員
菊池 雅彦
国土交通省

復興デザイン研究賞
審査委員
小林 祐司
大分大学

復興デザイン研究賞
審査委員
近藤 民代
神戸大学

復興デザイン研究賞
審査委員
佐藤 慎司
高知工科大学

復興設計賞
審査委員
柴田 久
福岡大学

U30 復興デザインコンペ
審査委員
髙橋 一平
髙橋一平建築事務所

復興デザイン研究賞
審査委員
田島 芳満
東京大学

復興デザイン研究賞
審査委員
田中 貴宏
広島大学

U30 復興デザインコンペ
審査委員長
内藤 廣
内藤廣建築設計事務所
多摩美術大学

U30 復興デザインコンペ
副審査委員長
野原 卓
横浜国立大学

U30復興デザインコンペ審査委員
復興デザイン研究賞審査委員
復興設計賞・政策賞・計画賞
審査委員長
羽藤 英二
東京大学

復興デザイン研究賞
審査委員長
原田 昇
中央大学
東京大学名誉教授

復興設計賞
審査委員
日野 雅司
SALHAUS
東京電機大学

復興政策賞・計画賞
審査委員
廣井 悠
東京大学

復興デザイン研究賞
審査委員
福田 大輔
東京大学

復興設計賞
審査委員
星野 裕司
熊本大学

復興デザイン研究賞
審査委員
本田 利器
東京大学

復興デザイン研究賞
審査委員
牧 紀男
京都大学

復興デザイン研究賞
副審査委員長
円山 琢也
熊本大学

復興政策賞・計画賞
審査委員
三宅 諭
三重大学

復興デザイン研究賞
審査委員
目黒 公郎
東京大学

復興デザイン研究賞
審査委員
森脇 亮
愛媛大学

復興政策賞・計画賞
審査委員
山口 敬太
京都大学

復興政策賞・計画賞
審査委員
渡部 英二
東急建設株式会社

復興政策賞・計画賞
副審査委員長
渡邉 浩司
民間都市開発推進機構

大会実行委員

復興デザイン会議会長
徳永 幸久
東京地下鉄株式会社

大会実行委員長
乾 久美子
乾久美子建築設計事務所
横浜国立大学

大会実行副委員長
中西 正彦
横浜市立大学

大会実行副委員長
野原 卓
横浜国立大学

大会実行副委員長
光田 麻乃
横浜市

復興デザインツアー小委員会
委員長
來山 尚義
復建調査設計株式会社

復興デザインツアー小委員会
副委員長
小川 紀一朗
アジア航測株式会社

大会実行委員
荒木 笙子
東北大学

大会実行委員
稲垣 景子
横浜国立大学

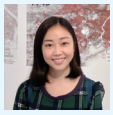
大会実行委員
井本 佐保里
日本大学

大会実行委員
浦田 淳司
筑波大学

大会実行委員
大野 桃菜
アジア航測株式会社

大会実行委員（事務局長）
北原 麻理奈
横浜市立大学

大会実行委員
小野 悠
豊橋技術科学大学


大会実行委員
小関 玲奈
日本工営

大会実行委員
小谷 仁務
京都大学

大会実行委員
小林 里瑳
東京大学
EPFL

大会実行委員
佐野 寿聰
アジア航測株式会社

大会実行委員
新宮 圭一
復建調査設計株式会社

大会実行委員
須沢 栞
東海大学

大会実行委員
中居 楓子
名古屋工業大学

大会実行委員
中尾 俊介
東京大学

大会実行委員
仲野 潤一
國學院大學
株式会社マルトラ

大会実行委員
永山 悟
東京大学

大会実行委員
萩原 拓也
名城大学

大会実行委員
牧 澄枝
アジア航測株式会社

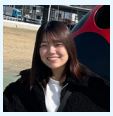
大会実行委員
益子 智之
東京都立大学

大会実行委員
益邑 明伸
東京都立大学

大会実行委員
渡邉 萌
東京大学

学生委員
近藤 愛子
東京大学

学生委員
佐藤 凌真
豊橋技術科学大学


学生委員
手代木 祐可子
東京大学

学生委員
平松 正吾
東京大学

学生委員
福谷 きり
東京大学

学生委員
増田 慧樹
東京大学

復興デザイン会議 第５回全国大会　登壇者

基調講演

関東大震災と都市デザイン
―震災復興のレガシーを引き継ぐ都市づくり―

12 月 10 日（日）
11:10-12:10

関東大震災によって横浜は大きな被害を受けた。現在も横浜市民に愛される山下公園は震災瓦礫を用いた埋め立てによって整備されたものであり、震災復興事業の最大の成果であるといえる。震災から約半世紀が過ぎた 1971 年にスタートした横浜の都市デザインは山下公園周辺地区から始まったと言っても過言ではない。この講演では横浜の都市づくりの歴史を紐解きながら、震災復興の遺産<レガシー>がどのように現在の都市づくりに生かされているかについて考えてみたい。

講演者
鈴木 伸治　横浜市立大学教授

【経歴】1968 年大阪生まれ。京都大学工学部建築学科卒業。東京大学大学大学院を修了後、東京大学助手、関東学院大学工学部助教授、横浜市立大学准教授を経て、2013 年より現職。現在国際教養学部長。

討議者
光田 麻乃　横浜市

若手・学生による復興デザイン研究発表

12 月 06 日（水）
18:30-20:00

Barbara Matelowska
東京大学

The abrupt influx of refugees poses challenges to host country's governance systems and disrupts long-term urban planning. The topic is introduced through a report on humanitarian relief actions in emergency accommodation and its consequent issues, in the effect of Russia's invasion on Ukraine and the resulting refugee influx in Poland.

Kasun Thalgaskotuwa
東京大学

Post-disaster resident migration has emerged as a primary research focus worldwide, representing a timely and significant concern for many countries grappling with the aftermath of natural disasters. Consequently, the utilization of resident migration modeling approaches is evolving as an essential study in infrastructure and urban development.

外柳 万里
大阪公立大学

関東大震災から 100 年を機に、福田徳三が当時唱えた「人間復興」の視座を参考に被災者の生活再建支援に着目してみたいと思います。災害後に被災者がどこへ避難しても「あの時、生きていてよかった」と思える災間の社会に向けて、何が必要なのかを考えていきたいです。

鈴木 敦己
東京大学

原子力被災地では今も避難指示が発令されており、ようやく帰還が始まった地域も少なくありません。地域の分断が一層進行する社会にどう立ち向かっていくのか、まずは帰還者向け住宅の事例をご報告したいと思います。

復興デザインとは何か？

12 月 09 日（土）
17:00-18:30

第１回～第５回の復興政策賞・計画賞・設計賞および U30 復興デザインコンペの受賞作品をレビューしながら、復興デザイン賞の歩みと、未来に向けた復興デザインの在り方を、フロアを交えて議論する。

内藤 廣
内藤廣建築設計事務所
多摩美術大学

乾 久美子
乾久美子建築設計事務所
横浜国立大学

五十嵐 太郎
東北大学

羽藤 英二
東京大学

ローカルな視点から考える地域防災と復興デザイン
：横浜のこれから 100 年に向けて

12 月 10 日（日）
13:00-14:30

稲垣 景子
横浜国立大学

関東大震災から 100 年目の横浜で、あらためて、地元神奈川・横浜の災害リスク（ハザードエリア）と私たちの暮らしとの関係を見直し、持続可能な都市・地域の方向性を考えたいと思っています。

石川 永子
横浜市立大学

「災間を生きる都市」に関連して、関東大震災での横浜の大火災での避難の課題等をふまえながら、横浜に特徴的な谷戸地形に広がる木造密集市街地のまちづくり協議会と研究室で議論している事前復興まちづくりの活動について紹介したいと思います。

秋田 典子
千葉大学

ボトムアップの復興活動は、言うは易し、行うは難し。１２年間の現地での活動の中で、その難しさを痛感し続けてきた。大規模な復興事業が、それこそバリバリと音を立てながら進む中で続いた、手作りの小さな復興活動の意味を改めて議論したい。

Post-Disaster Urban Planning:
Lessons from the UK after World War II

12 月 10 日（日）
14:40-15:40

Catherine Flinn
University at Albany

In Britain during and after the Second World War those who planned for the future focused on hope and potential, publishing modernist visions of new city centres. This talk will focus on how planning for reconstruction was approached, the problems around realising the plans, and the realities faced by blitzed cities after war. It will also look at impacts on those cities today, plus possible implications for disaster planning in future.

U-30 復興デザインコンペ

公開審査会／最終審査会　DAY3　12 月 09 日（土）
9:10-14:30

審査委員（敬称略）

審査委員長：内藤 廣（建築・都市）
副審査委員長：野原 卓（都市）
乾 久美子（建築）　岩瀬 諒子（建築）
岡部 明子（建築）　髙橋 一平（建築）
羽藤 英二（社会基盤）

災間はどんどん短くなってきている。いつ何が起きてもおかしくない時代を我々は生きている。今日は大丈夫だろう、今年は大丈夫かもしれない、などというなんの根拠もない正常性バイアスの力は強い。人は元来、楽観的な生き物なのだ。一方で、U30 にとっては、生きているうちに必ず遭遇するはずの非常時は、自らの切実な問題であるはずだ。その声に耳を傾けたい。

審査委員長　内藤 廣

一次審査通過者

グループ 1
88mの余白
- 藍による分断された水との関わりの再考 -

髙橋知来　方山愛梨　渡部美咲子
（愛知工業大学）

一次審査選出ありがとうございます。私たちは、長い間水害に悩まされてきた徳島県美馬市を対象に、藍染を介した水と人との関わり方を提案します。この機会を通して多くの方にこの作品に触れていただければと思います。よろしくお願いします。

グループ 2
まちを紡ぐ

糠谷勇輔
（信州大学大学院）

この度は一次審査選出ありがとうございます。学部四年間を福島県で過ごし、東日本大震災の被害や現状について身近に感じていた経験を契機として今後起こりうる南海トラフ巨大地震への警鐘をテーマに制作しました。私の提案が少しでも伝わるように頑張ります！

グループ 3
三木里柔靭化計画
～災間を生きる靭やかな知恵～

青山紗也　内田澪生　橋場文香　妙見星菜
（愛知工業大学）

過去に幾度もの津波を乗り越えてきた三重県尾鷲市三木里町。しかし、災間を暮らすうちに、災害の記憶は風化してゆく。私達は、日常の課題と合わせて非日常時を解くことで、国土強靭化の代替案として " 災間を生きる柔軟でしなやかな集落 " の実現を目指す。

グループ 4
ゆ脈を辿る
湯の原風景を活用し、ハザードマップを可視化する

川合布公帆　麻生美波　殿山愛弓
（奈良女子大学大学院）

私たちは、大津波の危機にある静岡県の伊東温泉でランドスケープ的視点から「泉脈」に着目し、「いざという時に適切な避難を可能にし、暮らしを豊かにする空間」について考えました。
地域の力を利用した災間について議論を深めていきたいです。

グループ 5
不確定領域の暮らし
- 道路の不確定領域を含めた住民の為の私的領域の設計 -

中家 優
（フリーランス）

住民の意思により、区道には指定されずに地元住民による共有私道となった場所は、現在も住民の共有インフラとなっている。
その変遷から、「火災」「避難」「震災」などを回避・改善しつつ、創発的で個性的な災間の都市としての可能性を提案する。

グループ 6
LINEAR MOSAIC
―海岸飛砂防備保安林のエリア活用―

大室 新
（京都工芸繊維大学大学院）

二次審査に選考いただき誠にありがとうございます。本作品では、飛砂被害の多い庄内海岸を対象に防砂林と街との関係性を再考するデザインを提案しました。当日は、よろしくお願いいたします。

グループ 7
Community Gas station

渡邉魁杜
（設計会社勤務）

原発被害を受けた福島県浪江町は、一度まちの人口を失った。現在町内では、地域に根付くガソリンスタンドが数少ない住民交流の場となっている。提案では、単なる給油所としての役割だけでなく、新たなコミュニティ創出の起点としてガソリンスタンドの可能性を見出していく。

グループ 8
スミダ・モノヅクリバイバル

星野祐輝　小林友喜　呉 暁龍
藤田彩乃　山田真帆
（東京大学）

首都圏での大規模な災害では復興期に自分たちのモノづくりによって生活を支える拠点が必要となります。町工場が林立する墨田区でまちづくりとしてこうした拠点を整備する提案を、実際にモックアップを作りながら考えていきます。

グループ 9
火の山と暮らす
～三宅島一周道路と火山防災建築を媒介とした地域ネットワークの維持～

御巫景祐　呉 雄仁　江尻龍馬　碓井 颯
（早稲田大学）

施工コストや使用度の低さから設置の進まない噴火対策構造物を、火山島である三宅島の一周道路沿いに日常の機能と組み合わせることで普及させる。災害時から災間まで使われるアイコニックな建造物が、時に我々の脅威となる自然とヒトの暮らしとを結ぶ。

グループ 10
Our Timeline

今田木葉実　洲崎玉代　倉澤龍平
佐藤翔琉　元吉千遥
（東京大学）

首都直下型地震へのタイムラインには、発災時に必要なミクロな連携はほぼ組み込まれていない。我々は、発災後の四時点における地域単位かつ地図ベースの「Our Timeline」を提案し、墨田区京島での半年間の実践を行ってきた。

復興政策賞・計画賞・設計賞

表彰式　DAY3　12月09日（土）
14:40-16:40

審査委員（敬称略）

審査委員長：羽藤 英二（都市工学）
副審査委員長：渡邉 浩司（都市計画／政策賞・計画賞）
乾 久美子（建築設計／設計賞）
政策賞・計画賞：廣井 悠（防災計画）
三宅 諭（地域デザイン）
山口 敬太（土木計画）
渡部 英二（復興事業）
設計賞：岡村 仁（建築構造）　柴田 久（景観設計）
日野 雅司（建築設計）　星野 裕司（土木設計）

今後の復興を考える上で、さまざまな復興活動の中から、審査員の復興に関わる地道な研究成果と被災地における経験と見識にもとづいて、災害に直面する地域の未来の選択肢となる活動を選びたい。その一方で、復興デザインとは何か、その問いに答えることは容易ではありません。被災した地域が置かれる状況は混乱しており、従前の標準的な政策や計画、デザインと呼んでいた経験の蓄積が全く役に立たない場合もあるからです。窮地に陥った或いはこれから陥るかもしれない地域で、果たしてどのような活動が求められていたのか？全ての人が賛成するプランもデザインも合意もあり得ない。だからこそ、答えのない問題に挑戦した誰かの足跡を讃えたい、そして、名もなき活動を支えた無名のみなさまに敬意を表します。本当におめでとうございます。
審査委員長　羽藤 英二

受賞者コメントはこちらからご覧いただけます。

復興政策賞

津波復興拠点整備事業

国土交通省

審査員コメント

津波復興拠点整備事業は、東日本大震災からの復興にあたってまちの拠点の早期整備のために創設された事業で、用地買収による中心市街地の早期復興を可能とした。また、1市町村あたりの地区数と国費支援の面積上限を定めることで集約型の中心拠点形成の実現を導いた。さらに拠点区域の土地の所有と利用の分離も可能としたため、商業施設建設が完了ではなく継続的なエリアマネジメントが重要であることへの理解が深まった。それは、各地でまちづくり会社が立ち上がり、様々なまちづくり活動が生まれる拠点区域となったことにも影響を与えている。事業を活用したのは 17 市町であるが、女川町、陸前高田市、大船渡市など事業を上手く活用した地域が新たなにぎわいを創出しているのは周知の通りであり、高く評価できる。被災前から人口減少、中心市街地衰退の著しかった沿岸地域であるが、整備された復興拠点から多様な活動が展開していくことを期待したい。

被災者生活再建支援法

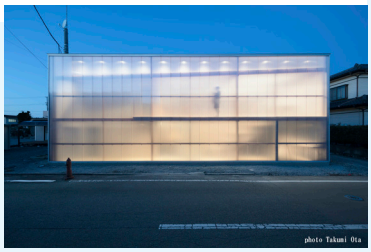
審査員コメント

被災者生活再建支援法は、生活基盤を破壊された被災者の自立的な生活再建を支援する必要性から、阪神・淡路大震災後に議員立法により制定されたもので、甚大な自然災害によって著しい被害をうけた被災世帯に行政が金銭的支援を行う制度です。制度設計のあり方にはいまだいくつかの課題が残っていますが、この制度の対象となった世帯は令和 5 年現在で 30 万世帯にもおよび、数多くの被災者の迅速な生活再建が図られました。これは、被災者の生活再建に行政が恒久的に寄り添い、金銭的にサポートするという意味で、また個人資産でありながら地域社会の復興と深く結びついている住宅が、ある種の公共性を有するという立場を明確にしたという点で、行政が被災者に向き合う姿勢を明確にし、そしてその後の防災・復興に大きな影響を与えた政策といえ、阪神・淡路大震災の復興が果たした最大の成果の一つといえる。

復興計画賞

小高パイオニアヴィレッジ

一般社団法人パイオニズム、株式会社小高ワーカーズベース、藤村龍至／株式会社アール・エフ・エー



審査員コメント

小高ワーカーズベースは、居住が認められていなかった旧原発事故避難指示区である南相馬小高地区で創業し、コワーキングスペースの開設後、食堂や仮設スーパー、ガラスアクセサリー工房、ローカルベンチャー事業の誘致・支援など、住民ゼロからの事業創出に取り組んでいる。ゲストハウス併設型コワーキングスペース小高パイオニアヴィレッジを地域拠点として若者を対象とする創業支援プログラムを生み出し、現実に複数社の創業を実現している点は特筆に値しよう。生業の再生は復興に欠かせない以上、当事者性を力強く発揮した彼らの取り組みは復興デザインを象徴する素晴らしい活動といっていいだろう。

復興計画賞は上記1件の他にも受賞候補があり、確定次第 HP で公表予定です。右上の QR コードからご覧いただけます。

復興設計賞

道の駅おながわ（女川駅前シンボル空間 / 女川町震災復興事業）

小野寺康（小野寺康都市設計事務所）、東利恵（東環境・建築研究所）、松尾剛志（株式会社プラットデザイン）、南雲勝志（ナグモデザイン事務所）、平野勝也（東北大学）、宇野健一（有限会社アトリエ U 都市・地域空間計画室）、末祐介（株式会社建築技術研究所・中央復建コンサルタンツ株式会社共同企業体）、独立行政法人都市再生機構宮城震災復興支援本部、鹿島・オオバ女川町震災復興事業共同企業体、株式会社建設技術研究所、女川町道の駅運営協議会（女川町・女川町商工会・一般社団法人女川町観光協会・女川みらい創造株式会社）

審査員コメント

区画整理を伴う震災復興事業の成功例として、女川町のまちづくりはすでに名高い。女川駅前から海へと延びる歩行者専用道路「レンガみち」は、「海を眺めてくらすまち」のシンボル軸として象徴的な風景を呈している。レンガみち沿道には「シーパルピア女川」や「地元市場ハマテラス」などの商業施設が並び、駅前の幹線道路沿いには公共施設や金融機関が配置されるなど、面的な人の流れが目指されている。2021 年 3 月、上記「シーパルピア女川」等の一帯が道の駅おながわとして登録され、翌月オープンを遂げた。復興とは、その後も長く続く地域の未来に繋がっていくものでなければならない。空間的な質の高さに加え、まちづくりコーディネーター等、外部有識者の継続的な関わり、「女川町復興連絡協議会」に始まる民間主導のまちづくり活動の成果など、その持続的な取り組みを高く評価し、道の駅おながわを復興設計賞として表彰する。

三次市市民ホールきりり

青木淳建築計画事務所

審査員コメント

「三次市民ホールきりり」は 2014 年に竣工した、劇場を中心とした芸術文化複合施設である。付近を蛇行する 3 本の川の氾濫により、昔から多くの水害に見舞われてきた敷地条件に対応するため、本計画は施設全体を 5m 持ち上げてピロティとし、駐車場や多目的スペースとして利用している。近年頻発している水害に対する、事前復興の先進的な事例となっている。搬入計画がタイトである劇場建築は、ピロティ形式を採用しにくい建築用途であると考えられるが、巧みなプラニング・動線計画によりそれを実現している。空中に持ち上げられたホールの立ち姿は、通常の劇場建築に見られる表裏のある建ち方とは明らかに異質なものとして表現されているため、地域による多目的な利用を受け入れる包容力と、ここが災害時の避難所となることを外観からも発信するデザインとなっている。そのように、この建築が日常と災害という非日常を繋ぎ、市民の災害への備えを想起させるデザインが実現していることを高く評価し、「三次市民ホールきりり」を復興設計賞として表彰する。

葛尾村復興交流館あぜりあ

葛尾村、一般社団法人 葛尾むらづくり公社、株式会社はりゅうウッドスタジオ、日本大学工学部浦部智義研究室

審査員コメント

福島第一原発事故後に村の決断で全村避難した葛尾村において、復興まちづくりも自治の精神が重視され、そのシンボルとして交流館「あぜりあ」は建設された。かつて赤松の集積と物流拠点であり、村役場にも近く、主要な道路と河川が交わる場所が選ばれている。平面はゆったりとした幅の空間が蛇行しながら連続している。将来が見通せない中でスタートしたことがきっかけとなって生まれた平面だが、見え隠れや所々設けられた開口部などは空間にメリハリと奥行きを作り出し、寛容な居場所を作り出している。民家の古材の利用や地域産材を使った縦ログ工法は、一般的な合理性を超えて地域のシンボルとしての空間を作り上げている。近年は道の駅化にも取り組もうとするなど、まさに葛尾村の復興とともに成長していく施設である。原子力災害という複雑で困難な災害からの取り組みとして復興建築の新たな可能性を具現化していることを高く評価したい。

次世代が描く地域復興：中高校生による復興・事前復興の活動

DAY4 12 月 10 日（日）
9:35-11:05

愛媛県立 宇和島東高等学校

地球温暖化による気象現象の激化。宇和島でも「わたくし風」と呼ばれる暴風が吹き、多くの被害が出ました。地元で取れる牡蠣殻に含まれる二酸化炭素をコンクリートに半永久的に固定することで海中、空気中の二酸化炭素量の削減と建築資材の地産地消を目指します。

大阪教育大学附属 高等学校天王寺校舎

今回は都市部に多くある自販機を活用した復興プランを提案します。現在、備蓄や人々の防災意識はまだまだ十分といえないと考えています。なので私は自販機の特性を活かし、三つの拠点機能を有した防災自販機ステーションを構築することを提案します。

浪江町立 なみえ創成中学校

普段生活するまちなかだけでなくあまり訪れない地域も訪れ、その地域に詳しい方のお話を伺いながら、自然との交わりの中で生まれたその地域の歴史や文化、暮らしについて学びました。初めて知ったことや感じたこと、浪江で取り組みたいことを発表します。

静岡県立 浜松工業高等学校

私たちの目標は、建築を軸に、浜松市の事前復興計画を提案することです。今年は、商店街 × 防災拠点のテーマで、市内のシャッター商店街に着目します。通常時に交流の場、災害時に防災復興の場として機能する建築により、街の資源の持続的活用と、災害対応力のある街を提案します。

愛媛県立 南宇和高等学校

事前復興について学ぶため東北研修に参加しました。復興・町づくりについて、一人一人が「どのような姿の町を残したいか」というビジョンを描き、とにかく行動することの大切さを学びました。現地で出会った方々の思いを受け継ぎ、私たちの言葉で伝えます。

愛媛県立 八幡浜高等学校

ー八幡浜には八高防災地理部があるー
私たちは行政・自主防災組織・企業の方々にアドバイスをいただきながら、高校生ならではの発想と機動力で地域課題を模索しました。アナログとデジタルが交差する先に集う八幡浜市民を想定して事前復興プランを提案します。

復興デザイン研究賞　受賞者

審査委員（敬称略）

審査委員長：原田 昇（交通計画）

副審査委員長：大月 敏雄（建築計画）
円山 琢也（交通計画）

姥浦 道生（復興都市計画）　小野田 泰明（建築計画）
菊池 雅彦（復興計画）　小林 祐司（避難行動）
近藤 民代（居住環境計画）　佐藤 慎司（海岸計画）
田島 芳満（海岸工学）　田中 貴宏（都市計画）
羽藤 英二（都市計画）　本田 利器（地震工学）　牧 紀男（防災計画）
森脇 亮（環境工学）　福田 大輔（交通計画）　目黒 公郎（防災計画）

復興デザイン賞は、復興の現場との応答や実践への展開を意識して取組み、それを解決する新しい復興デザイン分野の構築に貢献し、具体的な成果をあげている個人、あるいは、その可能性が高い個人を高く評価してます。今年度は、自薦・他薦合わせた 20 名の応募者の中から、彼らの主要論文・関連論文、推薦理由を参照し、審査委員会での評点と議論に基づいて、4 名の受賞者を決定した。この論文賞の取組みが、復興デザイン研究の多様な展開の一助となることを期待する。

審査委員長　原田 昇

最優秀研究賞

国内外における事前復興計画と居住地移動（Residential Mobility）に関する一連の研究

大津山 堅介

この度は復興デザイン研究賞・最優秀研究賞を賜り、身に余る光栄に存じます．ご指導・ご助言をいただいた皆様に心より御礼申し上げます．環境適応としての居住地選択・移動が学問としての昇華を果たし，実務への貢献ができるよう今後も精進してまいります．

【経歴】関西学院大学総合政策学部卒，9 年間の民間企業勤務を経て，2016 年京都大学大学院地球環境学舎修士課程修了，2020 年 3 月 同大学院工学研究科建築学専攻にて博士（工学）取得．2020 年 4 月東京大学先端科学技術研究センター特任助教を経て 2023 年 4 月より特任講師（現職）

優秀研究賞

地方都市における減災・復興に関する都市計画的研究

浅野 純一郎

このたびは栄誉ある復興デザイン研究賞を賜り、大変光栄に存じます。私は土地利用や都市計画史研究を主に行ってきましたので、今回の賞を他薦でいただけたことは、大変な驚きであると同時に、新たな気づきを与えていただいたと感じております。関係された皆様に感謝申し上げる次第です。

【経歴】1968 年生まれ。豊橋技術科学大学大学院教授。豊橋技術科学大学大学院修士課程修了、長野高専等を経て 2015 年 4 月から現職。博士（工学）。著書に『都市縮小時代の土地利用計画』（学芸出版社）、『地方における戦後都市計画』（中央公論美術出版）等。

状況認識を考慮した令和 2 年 7 月豪雨時の避難行動に関する研究

柿本 竜治

優秀研究賞，誠にありがとうございます．地域の防減災への実践的な取り組みに研究成果を生かしていきたいと思います．また，熊本地震および県南豪雨災害からの復興には継続的して関わってまいります．お知恵をお借りしたいときは，ご協力よろしくお願いします．

【経歴】1993 年熊本大学工学部助手，1999 年工学部助教授，政策創造研究教育センター准教授を経て，2010 年大学院自然科学研究科教授，2017 年くまもと水循環・減災研究教育センター長（併任），2022 年くまもと水循環・減災研究教育センター教授（センター長）．

大規模自然災害後の仮住まい状況ミクロシミュレーション手法の開発

佐藤 慶一

復興デザイン研究賞を頂き、大変嬉しく思っております。ミクロシミュレーションは、PD 研究員時代に開発したもので、翠川三郎先生や中林一樹先生にご指導いただきました。その後、東京都大学提案事業「首都直下地震時の仮設住宅不足への対応準備」の提案･実施につながりました。ご指導いただいた先生方、関係した皆様に厚く御礼申し上げます。

【経歴】専修大学教授。慶應義塾大学環境情報学部卒業。慶應義塾大学大学政策・メディア研究科後期博士課程修了。東京工業大学都市地震工学研究センター研究員、東京大学社会科学研究所助教、准教授を経て現職。2021～22 年、ハーバード大学ライシャワー日本研究所客員研究員。

奨励研究賞（学生）

該当者なし